

福生に残る四棟の民家

民俗調査民家班

# 福生の民俗

## 福生に残る四棟の民家

福生市  
文化財総合調査

### I 序

#### I-1 調査の目的

過去の生活様式と今日の生活様式が全く異なっているため、建築、とりわけ住宅は現在大きく変貌している。今日私達の周囲に見ることのできる住宅は、種々の問題を含みながらも現代生活様式に適合するようになつてゐる。それらの変化にとり残された建物はいかにも良い建築であろうと本来の目的を終えた建築であり失なわれて行く。

私達は年々茅葺屋根の民家が失なわれてゆくのが残念でならず、現代の日本人が否定した住宅の姿を私達自身の目で見、記録に留めることを今回の調査の目的とする。

### I-2 調査対象と方法

民家についての研究は戦後いちじるしい成果があがつており、現在も研究が続けられている。東京でも石原憲治氏を中心として、

心に研究が行なわれ、福生の一部の民家もすでに調査されている。私達は能力の及ぶ限りこれらの成果を学び、福生市に残つてゐる数軒の茅葺民家を対象に、現状の平面、断面を調査した。また柱に残つてゐる痕跡を調べ建築当初の姿を想像した。

#### ① 現状平面図

天井、床、建具の現状を記入した。

#### ② 断面図

土間と「ざしき」の境い目を土間から「ざしき」を見る方向で現状の断面を記録した。梁の湾曲の程度、軒先の細部、棟の細部等は、建築技術上重要であるが、意匠的に重要ではないと私達が判定した部分は省略した。

#### ③ 主要寸法図

主要な現状寸法を記録した。柱間寸法は柱の内々で測定し、両端の柱径の和の平均を加え心々寸法に計算して記入した。なお、差鴨居の背については現状平面図に記入した。測定不可能な部分、明らかに最近改造された部分は、一部省略した。

#### ④ 痕跡図

現状部材、主に柱に残る痕跡を記入した。

#### ⑤ 復元図

痕跡図、および聞き取りにより、創建当初の平面を想像した。

改造の程度が激しいものは、聞き取りをもとに建物の持ち主の記憶の範囲内で復元図を作成した。そのため本来の復元の意味と異っている。

柱なお寸法は5mを最小の単位として測定した。

## II 調査各棟の現状並びに考察

### II-1 笹本文次郎氏宅

(福生一一四六番地)

大正八年に、現在の位置より五百米程離れた位置から引いてきた。屋敷前の道路は明治神宮創建工事の折多摩川から砂利採取した時のトロッコ道の跡で、敷地の形はそのために大部分変化した。敷地の鬼門には屋敷神として稻荷様を祭つた。井戸は東側に掘り水脈はよい。家業は農業で養蚕をやり四十貫位とつた。畑は「ハケシタ」で肥料桶を天秤で担いで行くのがとても骨が折れたなどの聞き取りが得られた。

現状は、南に縁側が残り、土間には昔「ハタヤ」と呼ばれ

た床の低い板敷の部分と、その外側に風呂場があり、床上部は八畳の部屋が南側に二室並び、北側に五畳と三畳の畳敷の部屋、西側には押入と便所、床上部分と土間の間には板敷の部分がある。

柱には手斧けずりの柱が三本見られた。「デエ」と「フト

ンベヤ」の境にある中央の柱と、田の字の交差する部分の柱は、手斧の模様が異っている。同時期の柱であれば同じ模様の手斧のあとがつくのが一般的である。手斧はかんなが使われる以前の仕上工具であり、手斧けずりの柱は古いと言われている。福生ではいつごろまで手斧が使用されていたか不明であるが、一般に上級建築物より下級建築の方が手斧けずりが遅くまで採用されている。したがつてこの場合手斧は建築年代の推定材料とはならない。

部材の表面の色、製材のなされ方など、一見して新しい柱は痕跡図にNの印を付した。

痕跡が対応部材間に同様についていない点、不要的な痕跡が残っている点、新しい柱が約半数を占める点などから、この建築の復元は不可能である。

最も古い柱である手斧けずりの柱の中でも同時期のものとは考えにくく、又新しい柱でも同時期とは考えられない点から、この家の部材は数種の部材を寄せ集めたもの、あるいは、相当多數回の改造により雑多な年代の柱が入り混つていると考える。

笹本氏の記憶をもとに、大正頃の間取りを復元すると復元図のようになる。

間取りは現状と殆んど変らず、入口の大戸が現在廃されていること、風呂場が新たに建てられたこと、縁側がやり直されたこと、北側の部屋を改善したこと、押入を新たにつけた

こと、便所をつけたこと、「あがりはな」の板敷がやり直されたことが判明した。

各室に残る古い呼称は復元図に印した。「デエ」「ザシキ」

「デエドコ」「ハタヤ」は他地方にも見られ、また 笹本氏の記憶にもはつきり残っていた。しかし、「フトンベヤ」という名は不明確であつた。ザシキの北方の部屋の名称は残つておらず、この部分は過去において独立した一室ではなかつたと思われる。

他地方ではヒロマ型という間取りが存在しており、民家の間取りでは田の字型よりも古いものとされている。 笹本家でも、ザシキと北方の部屋とを一室と考えればヒロマ型と言える。「ザシキ」という名称もヒロマ型に残つてゐる。

また「フトンベヤ」は暗い部屋で、壁に囲まれていたという聞き取りが得られた。「フトンベヤ」が壁で囲まれた暗い部屋であつたのは、「フトンベヤ」の東方の仕切も壁であつたためとも考えられる。しかし、そのような痕跡はなかつた。またザシキ北側の板戸も後世のものという確証は得られず、 笹本家がヒロマ型の民家であつたとは断言できない。しかし、大正頃の間取りが建築当初の間取りであつたとは言えない。

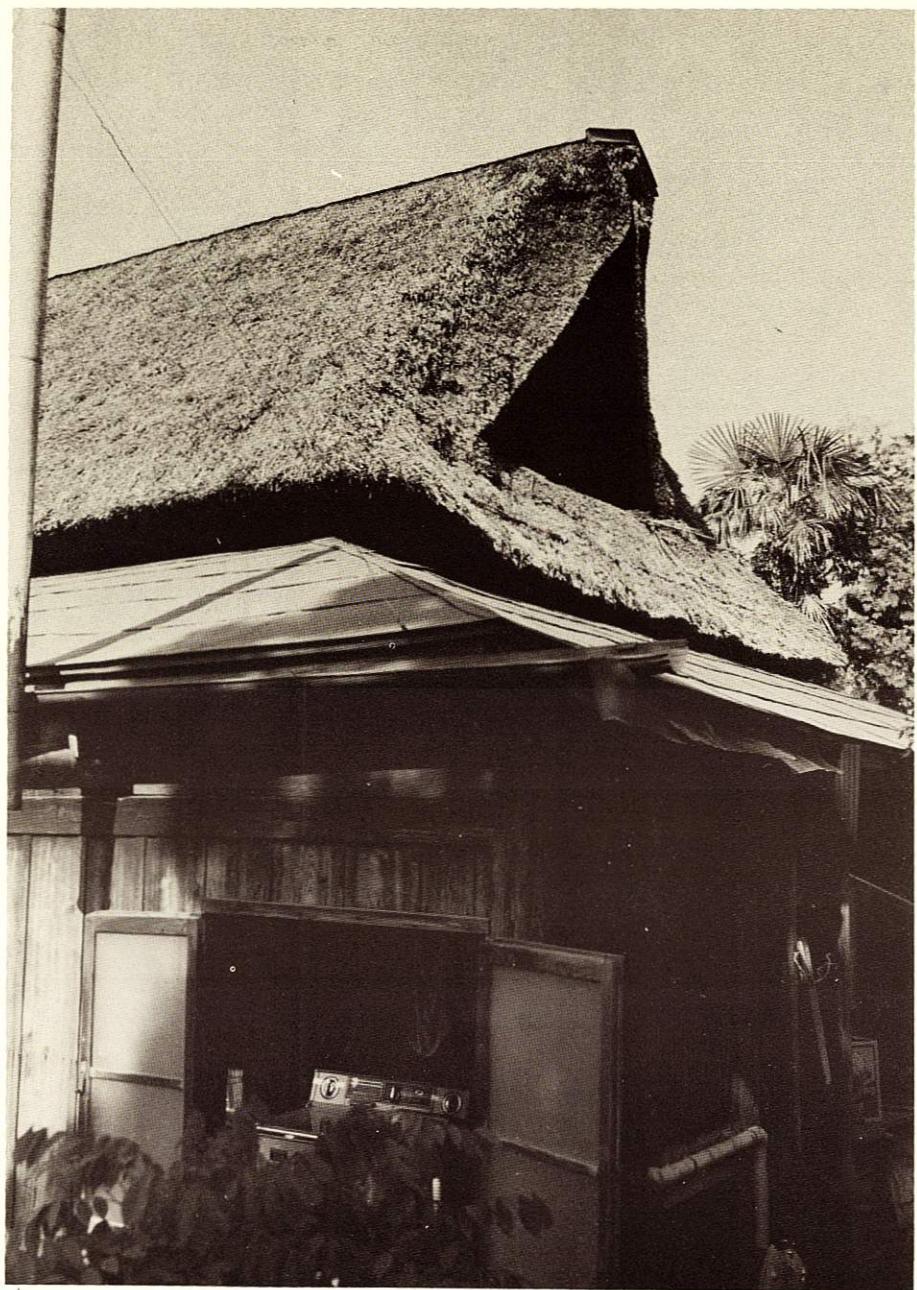
天井について、現在板のスノコ天井であるが、以前は竹のスノコ天井であつたとの聞き取りが得られた。

こと、 笹本氏の代になつてからも改造がなされたことである。

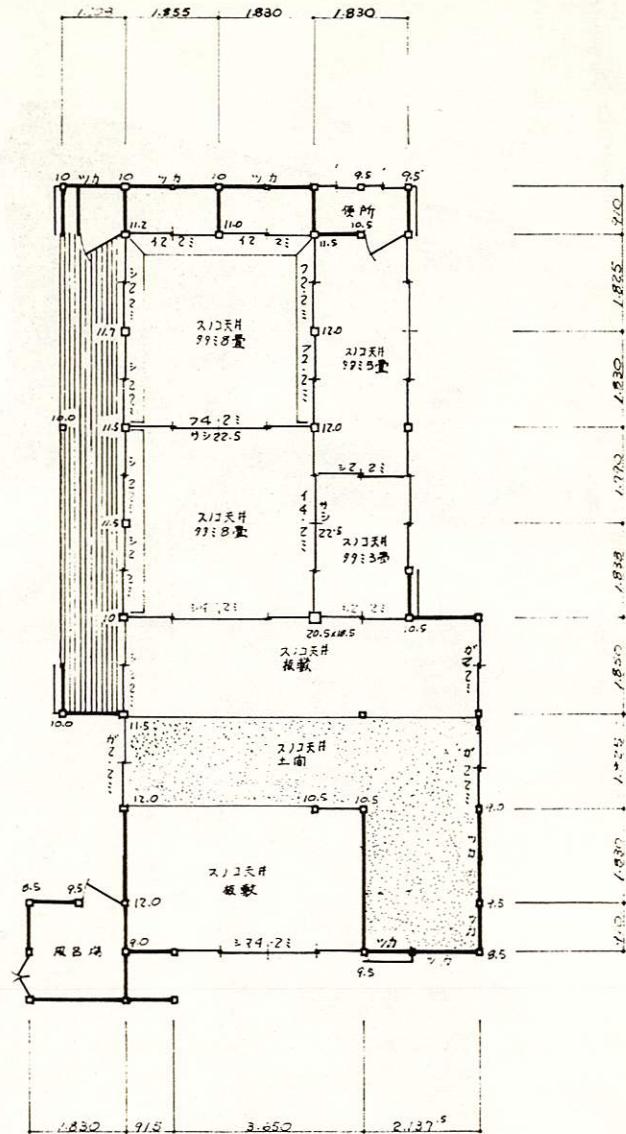
笠本文次郎宅庭右前より正面

-32-

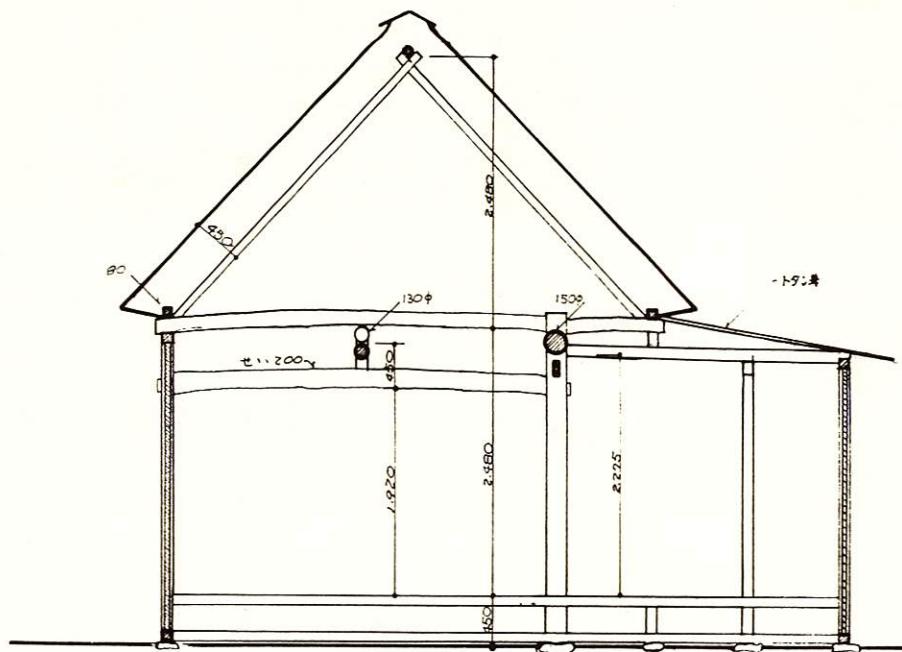




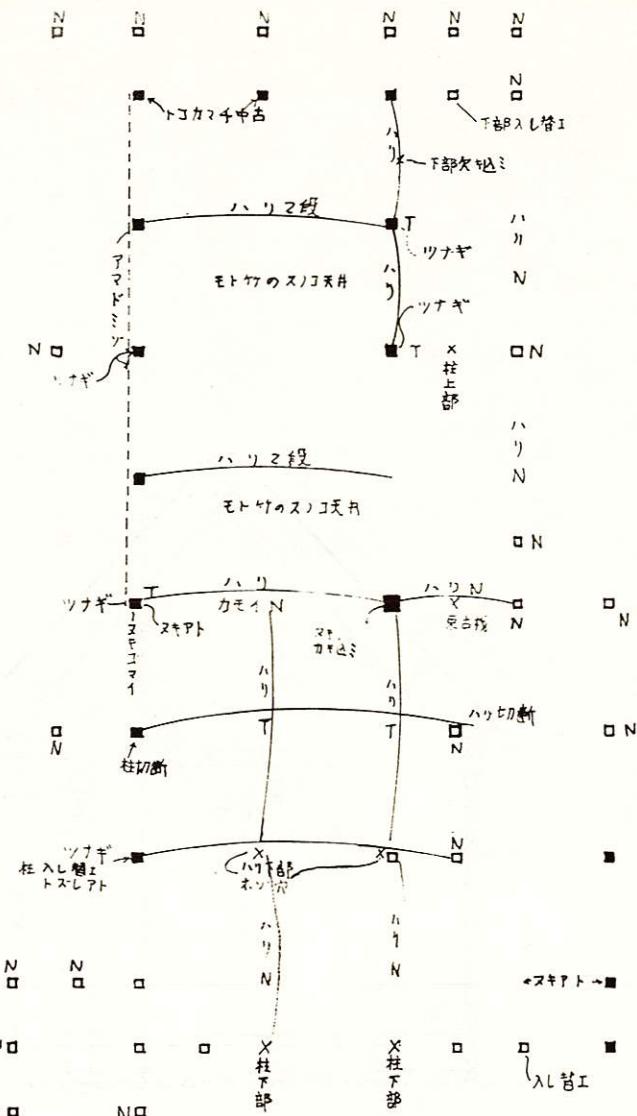
笠本文次郎氏宅右側破風



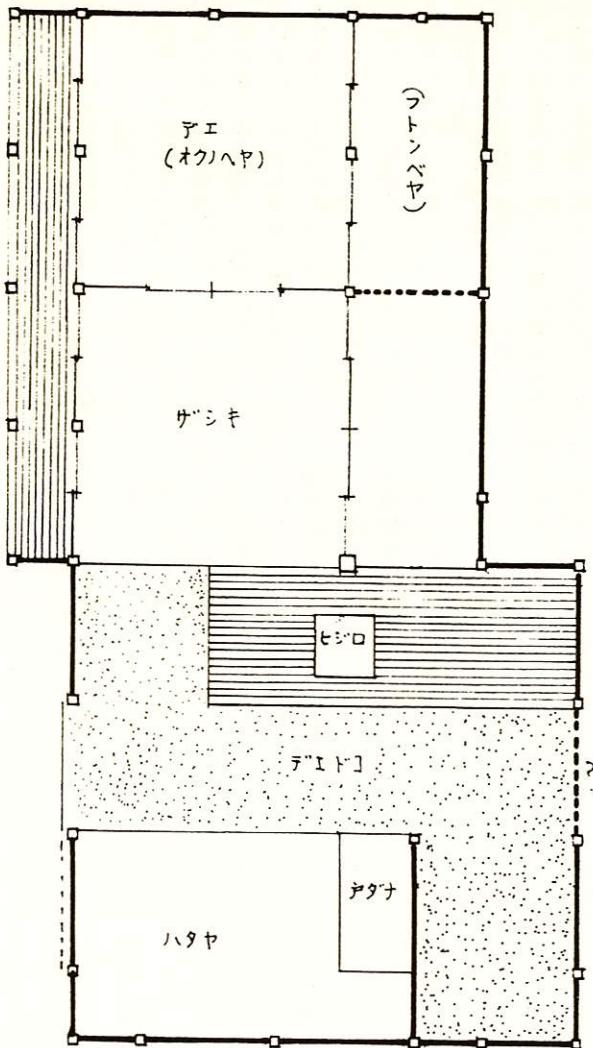
笠本文次郎氏宅
東京都福生市福生 1146
現状平面図 1/100
調査年月日 昭和50年3月30日



笛本文次郎氏宅
東京都福生市1146
断面図 1/50
調査年月日 昭和50年3月30日



篠 本文次郎 氏 宅
東京都福生市 1146
痕跡図 1/100
調査年月日 昭和50年3月30日



笠本文次郎氏宅	
東京都福生市1146	
復原図	1/100
調査年月日	昭和50年3月30日

(福生一一三九番地)

小名田中と言われる地にある村野家は、中福生の村野家の分家と言われ、所謂「田中の三軒」と言われる一軒で、今でも中福生村野家と同様清岩院の檀家である。仏壇を拝すると、明和三丙戌（一七六六）の位牌があり、これが村野家の初祖と考えられる。

小名田中の起りは、神明神社附近の湧水を利用して一帯が田圃であつたあたりに居を定め、所謂当時の開拓農家であつたからであろう。村野家は福生においては大農家としての當みをしていた。8反歩余の農地を持ち、作男を使つていた農家であつたなどの聞き取りが得られた。

酒造の田村家が現位置に新築されるに当り、米穀油等を商つた旧田村家の古材木を譲り受けてこの家が建てられたとの言い伝えがある。田村家には一八〇一年（享和）棟札が残つてゐることであり、その時田村家は新築され、以前の建物の部材を田村家より譲り受けたものが現在の村野家の建物と解釈できる。したがつて村野家は十九世紀初頭の建物とも考えられる。

現状は入口を入れると左正面に格子戸が見え、土間に張り出している。入口を入つてすぐ左側には板敷のあがりはながある。この板敷部分の後方は障子で仕切られており、「ザシキ」と呼べる一〇畳の部屋につながつてゐる。

土間は障子、板戸で二分されている。現在の物置として使われている部分は中二階となつておらず、明り採りの障子窓がついている。

ザシキの天井は現在竿縁天井となつてゐるが、その上方にはスノコ天井が張られている。柱配置は複雑であり壁の途中に柱が建ち、障子は大黒柱とぶつかつていらない。

デイとザシキの仕切りには帶戸が使われている。デイの天井も竿縁天井になつてゐるが竿縁の方向が他の部屋の方向と異なり、その上方にはスノコ天井が張られている。

北側には六畳、四畳半、板敷の部屋が並んでいる。板敷の部屋は現在敷物が敷かれてゐるが、上部にはヒジロのかぎが残つており、過去ここにヒジロがあつたことがわかる。

以上が現状の概略であるが柱の部材を見ると大別して三種の部材に分類できる。大黒柱・南外側の柱は表面の色が黒ずんでおり、さらさらしている。北側の柱は白っぽい色をしており、製材され方が新しい。土間周囲の柱は、これら二種の柱とは異つて部材表面の色は古そうであるが製材され方が整つており、私達はこれを中古のものと考える。

間仕切上部の差鴨居は柱の黒ずんだ色と異なり、茶色味を帯びており、柱との仕口にすきまがある。当初からのものと考へると差鴨居だけ感じの異つたものを使用する意図が不明である。また柱との仕口のすきまは、地震や移築の際にすきまができたもののように思えず、後の時代に柱を欠き込んだ

で差鴨居を取り付けたと考える。差鴨居の上部には現在束が立っている。束の色と柱の色は同じであり、当初はここに柱が立っていたと考えられる。

北側の柱は新しくなつており、当初の姿は不明である。

聞き取りによると村野真一氏の代になつてから西側の押入を新たに取り付け、南側の縁側をやり直し、ザシキと土間の間のアガリハナも新たにやり直したことが判明した。しかし北側の部分は当代がやり直したものではないとの聞き取りが得られた。

土間の入口は柱に戸ずれのあとが残り、大戸が有つたことがわかる。大黒柱上部には梁の取りついていた仕口、貫、小舞の痕跡が梁仕口の上方に残っている。この部分は当初梁が付き、その上部は土壁になつていたことが判明した。現在の障子は新しく、アガリハナも改造されたものである。この部分に間仕切をとりつけるには梁の下に鴨居を釣り下げない限り不可能であり、梁と鴨居の間に壁が無ければ不自然である。したがつて当初ここに間仕切のあつた可能性は少ない。

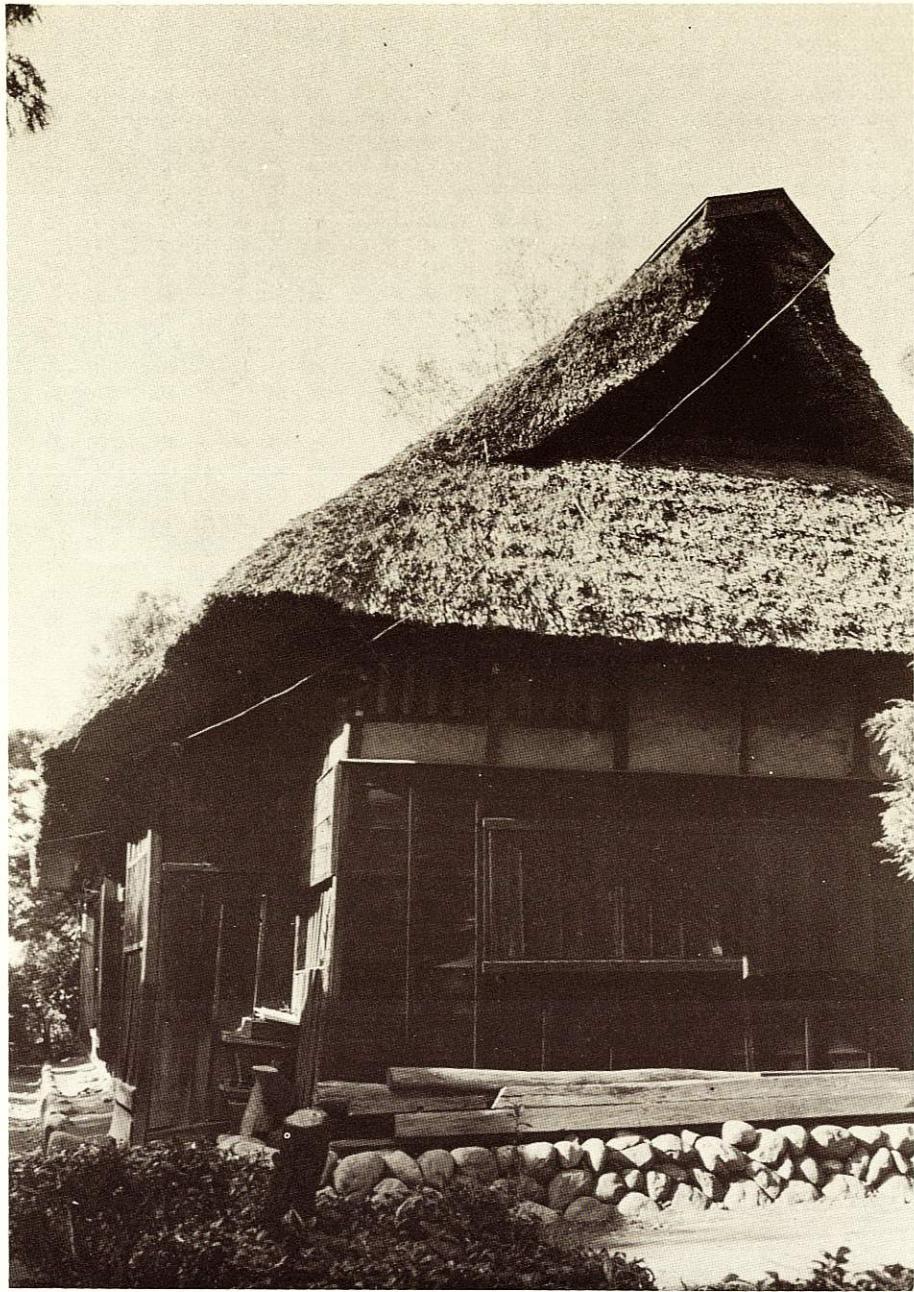
入口から入つて左正面に見える格子戸はいつごろのものか、この家の為に作られたものか不明であるが、柱が当初のものか不明である。ハタヤは織物生産の場であつたと考えられる。

が、ウマヤは馬が飼われていた形跡は無く、むしろ米、ミソ等が置かれていたと考える。

ザシキの柱配置が複雑である理由は、当初この部分が畳ではなく、板敷であつたため、畠の大きさと関係のない柱間寸法で計画されその後柱を入れて畠敷にしたと考えられる。したがつて、当初の床仕上げは、「デイ」のみが畠敷であり、その他は板敷であったと考える。

当家に残る位牌のうち最も古いものは明和三年（一七六六）のものである。しかし現在残っている建物はその当時の面影を残しているとは言えない。前記したように、明和の頃に建てられた建物を、田村家の建て直しに伴なつてその古材を使い大規模に改修し、以後数次の改造を繰り返し今日に至つたと考えるのが妥当と思う。

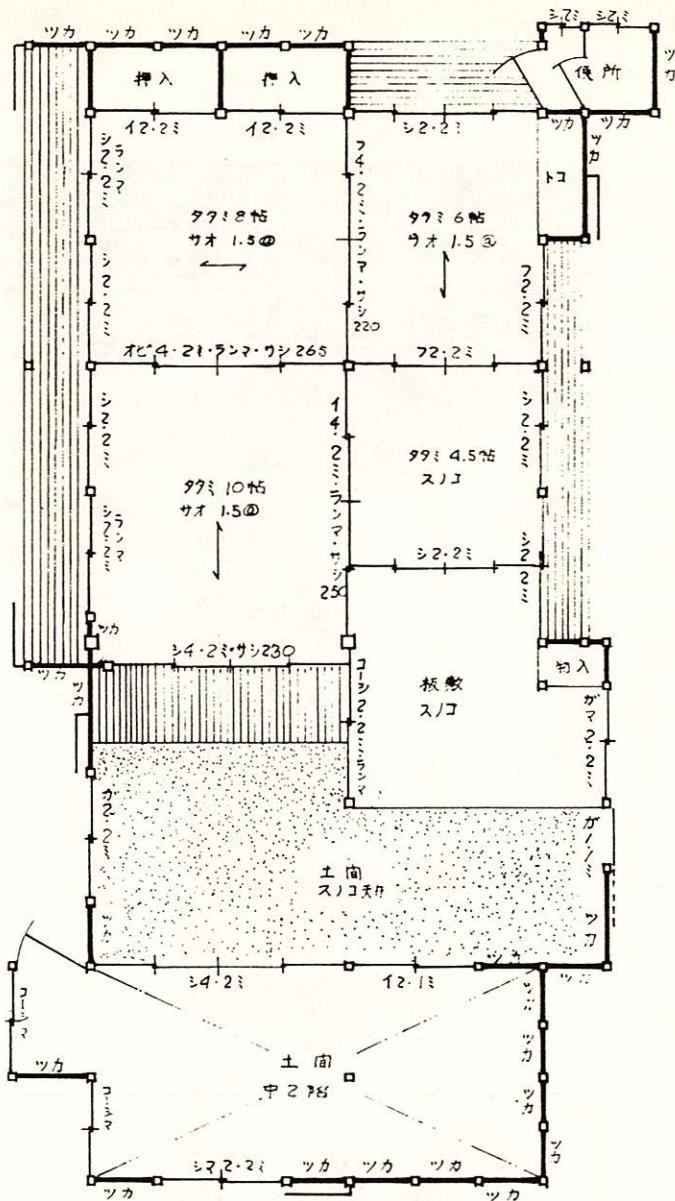
部材が一時期のものでなく、痕跡もこの家の改造によつて残つたものか否か判断できず、村野氏の記憶に残る範囲で復元図をかいた。



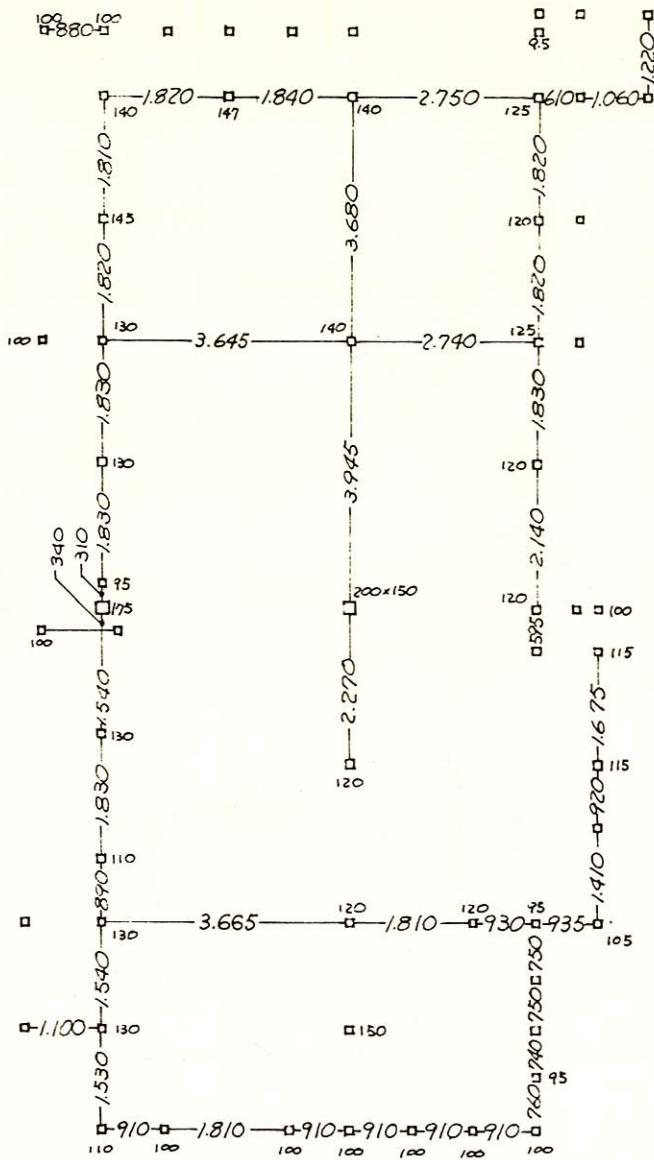
村野真一氏宅右側面



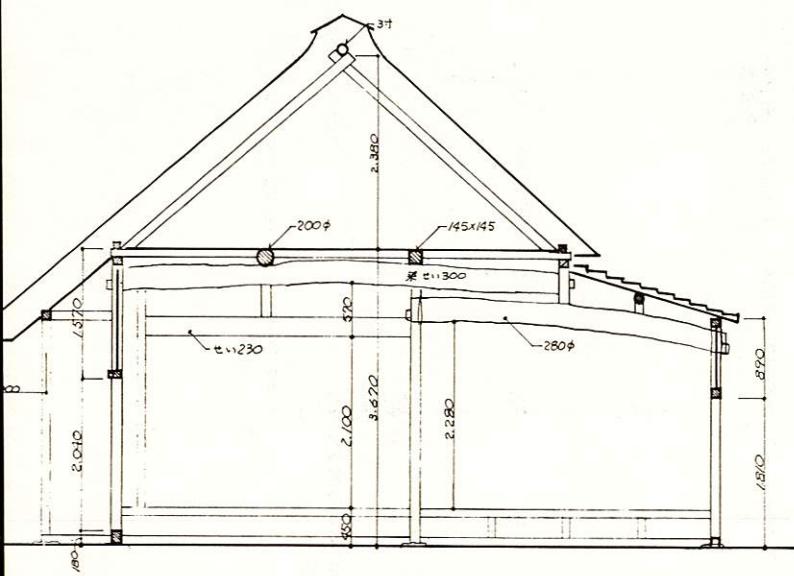
村野真一氏宅庭右前より正面



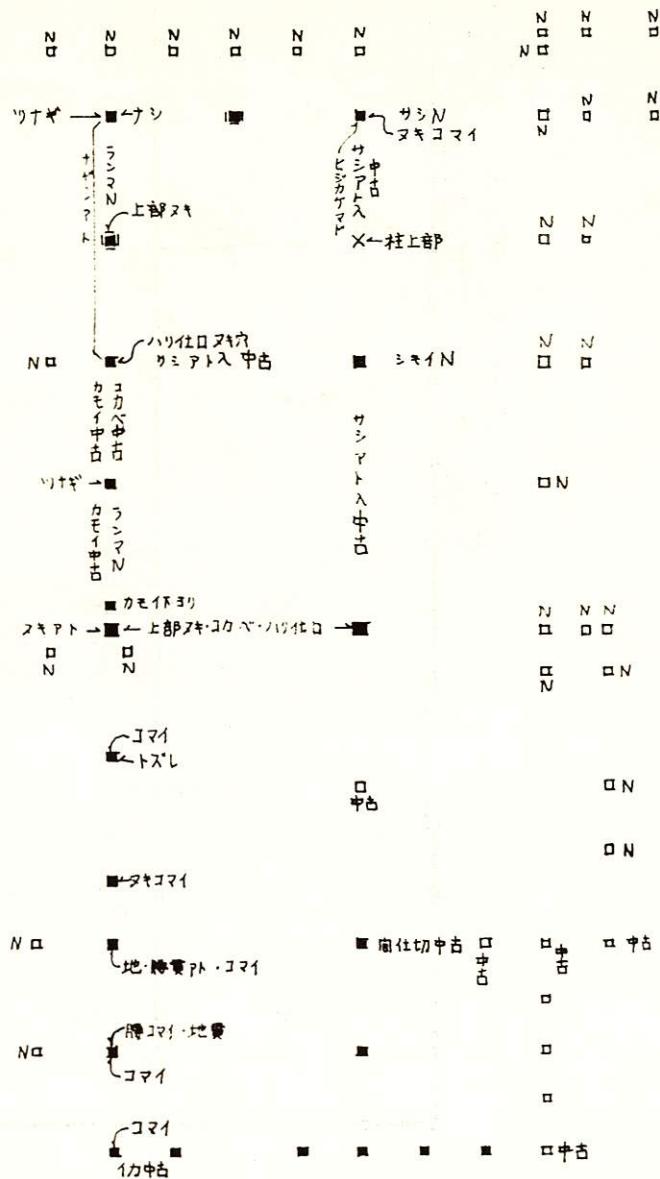
村野真一氏宅
東京都福生市大字福生1139番地
現状平面図 1/100
調査年月日 昭和50年4月13日



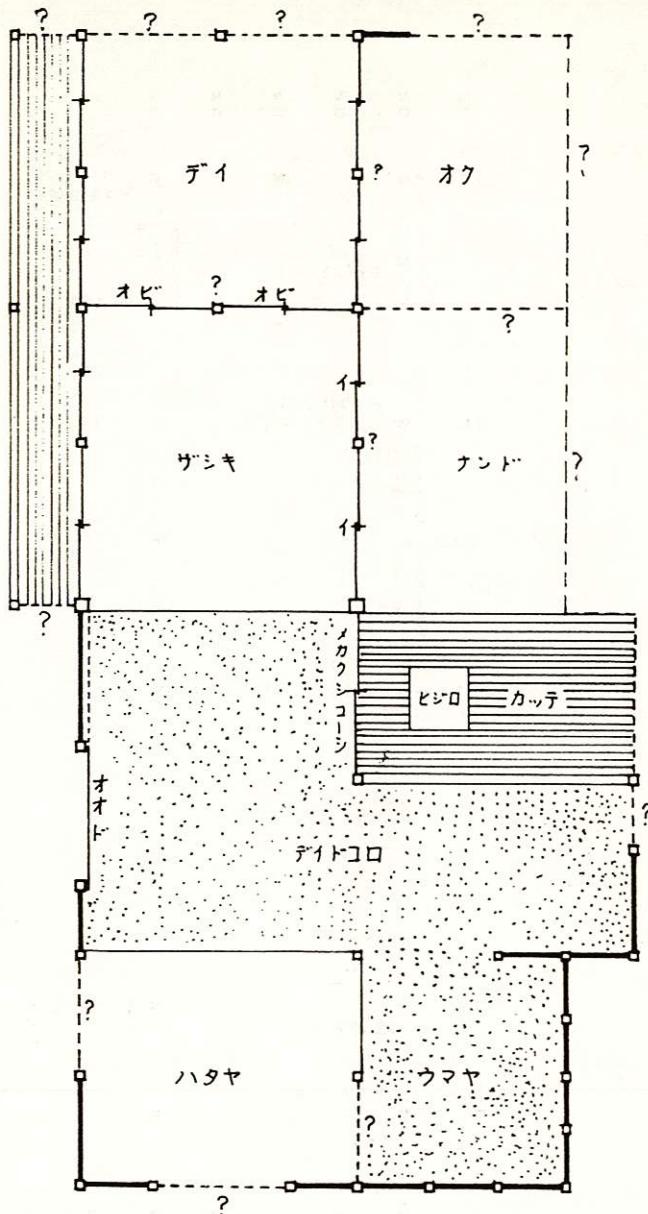
村野真一氏宅
東京都福生市大字福生1139番地
主要寸法図
1/100
調査年月日 昭和50年4月13日



村野真一氏宅
東京都福生市大字福生1139番地
断面図 1/50
調査年月日 昭和50年4月13日



村野真一氏宅
東京都福生市大字福生1139番地
痕跡図 1/100
調査年月日 昭和50年4月13日



村野真一氏宅
東京都福生市大字福生1139番地
復元図 1/100
調査年月日 昭和50年4月13日

(志茂二八番地)

現状は八畳二室、その北側に幅一間の部屋が二室続き田の字型平面となつてゐる。土間に板敷の部分が張り出し、土間をはさんで物置と七畳の部屋がある。

入口の大戸は現在使われていないが残存している。この大戸は改造を受けてゐる。コエンは当初のものが不明である。

コエンとアガリハナザシキの間は現在障子で間仕切られてゐる。しかし敷居は新しく、差鴨居も新しく改造されたもので、この部分の間仕切は後補である。

南側の開口部には三本溝の鴨居が残つてゐる。また柱に風触の跡が有り、当初建具は一枚板戸一枚障子を引違ひに開いていたものである。このような間仕切は雨戸が使われる前のものであり、雨戸は後世つけられたものである。

「カツテザシキ」とヘヤとの間は現在襖で仕切られているが、片袖壁の痕跡があり、北側の柱には畠上端から一・二五メートルの高さに鴨居の跡が有つた。この痕跡は人間の出入り以外の目的の引戸が付いていたことを意味し、現在の襖は後補のものである。

「カツテザシキ」の周囲の柱は当初のものである。床には「イロリ」の跡があつた。現在風呂場となつてゐる部分は後に付け加えられたものである。しかし「カツテザシキ」の北側柱の外部には貫、小舞の痕跡があり、聞き取りにより戸棚が付いていたことが判明した。「カツテ」と「カツテザシキ」の間にも現在間仕切が入つてゐるが、この部分の上部に梁が取付けられた痕跡があり、当初ここに間仕切は無かつたと思われる。

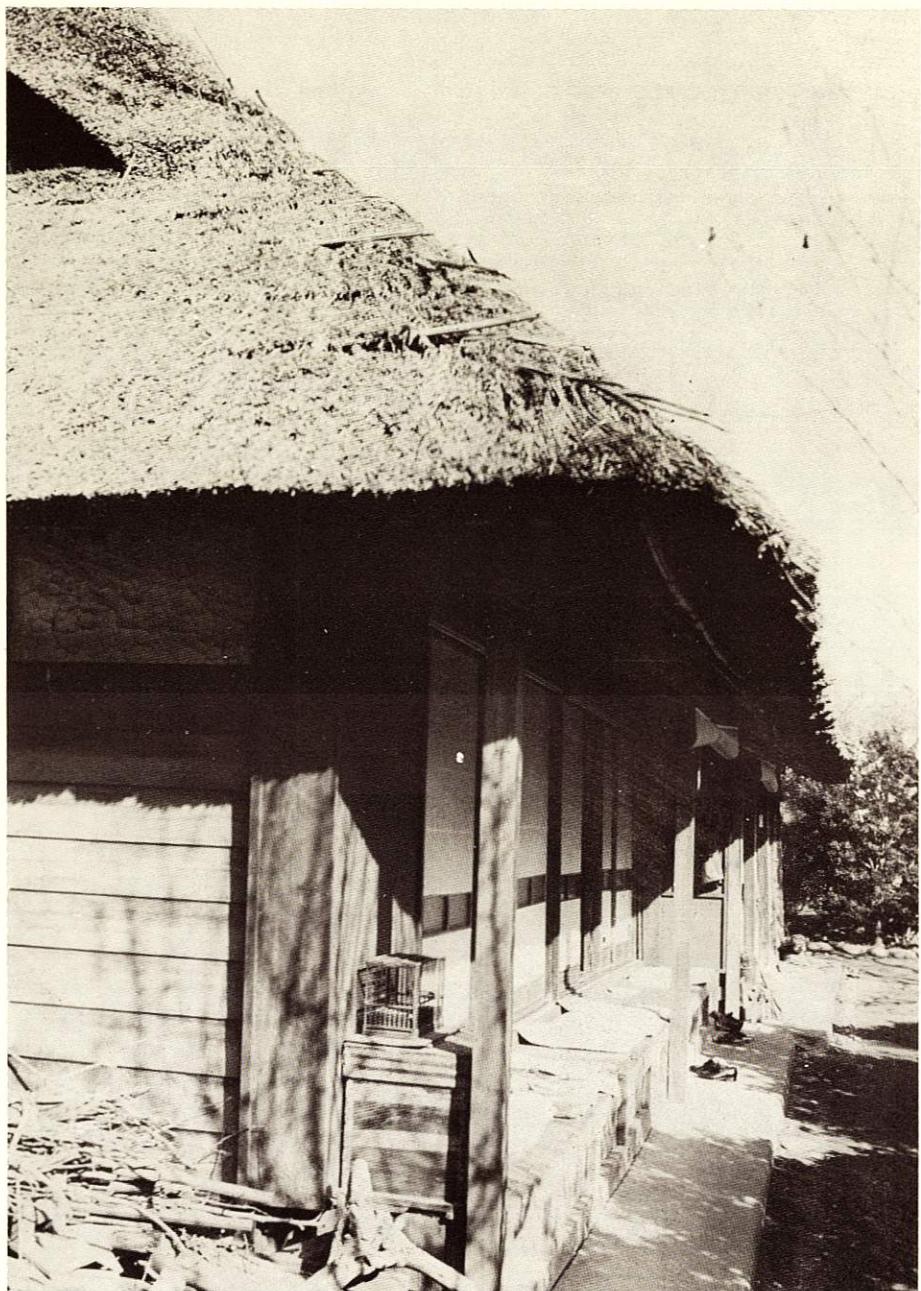
「オク」の西側には床の間と押入が付いてゐる。しかし床の間の落し掛けの裏にはタルキの痕跡と思われる痕跡がある。当初からの床の間とすればこの痕跡がつくはずが無く、改造を受けたものである。西側外周の柱は新しく、床の間および押入は当初は無かつたと考える。しかし、押入の柱、床の柱

に土壁または板壁の取り付いていた痕跡は無く、当初の姿を断言することはできない。この部分の柱は取り換えられており、おそらく壁であつたと思われる。

「ヘヤ」と呼ばれる部屋は、北側の柱は新しく、便所・押入も新しく、北側・西側とともに改造を受けていたため不明である。

「カツテザシキ」とヘヤとの間は現在襖で仕切られているが、片袖壁の痕跡があり、北側の柱には畠上端から一・二五メートルの高さに鴨居の跡が有つた。この痕跡は人間の出入り以外の目的の引戸が付いていたことを意味し、現在の襖は後補のものである。

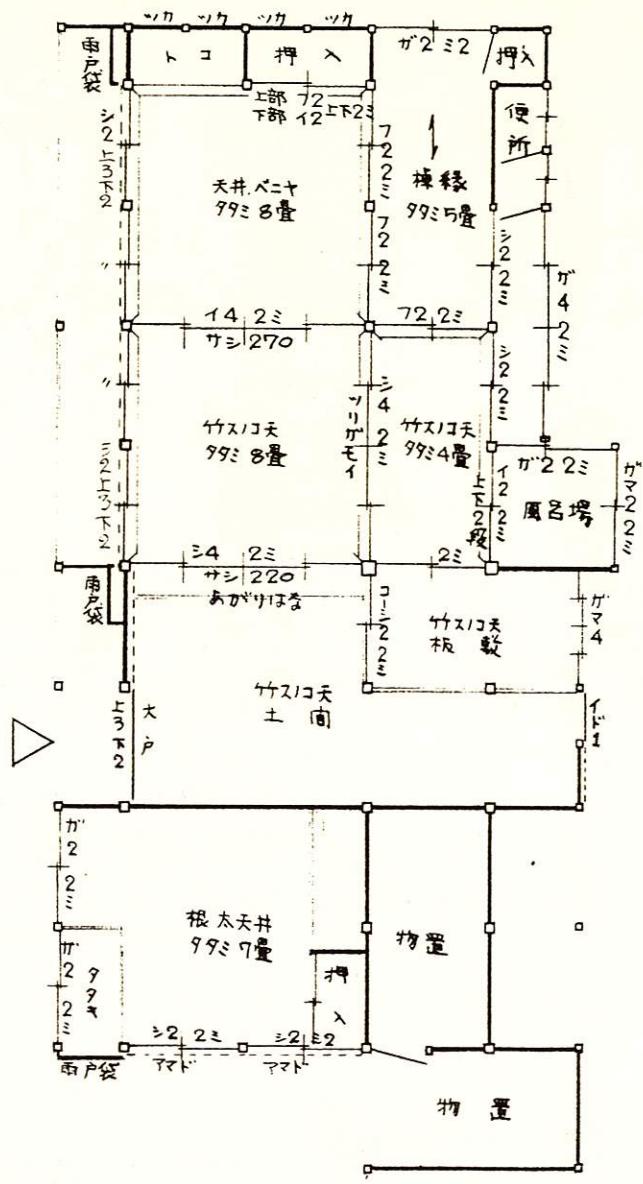
られた。ミンベヤの北側は昔、「オロシ」と呼ばれ、外部から物置として使用していたとの聞き取りが得られた。  
土間に張出している板敷の部分は改造を受けやすく、この部分の格子戸も、当初のものか不明である。  
井上家に残る位牌のうち、最も古いものは寛政へ一七八九（一八〇〇）のもので、建物はおそらくその頃のものと思われる。



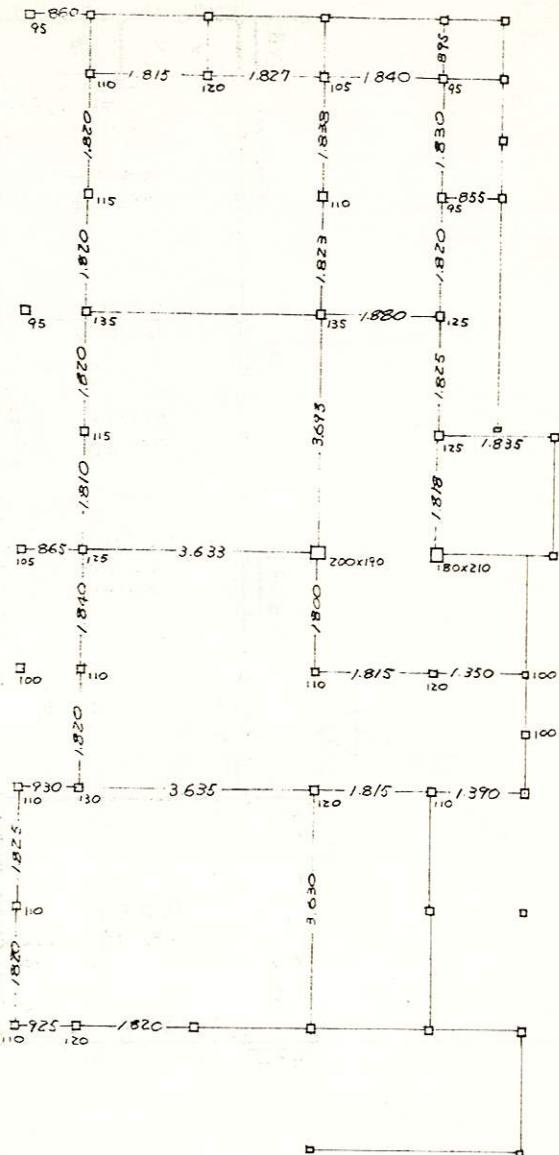
井上芳江氏宅縁側を左側より



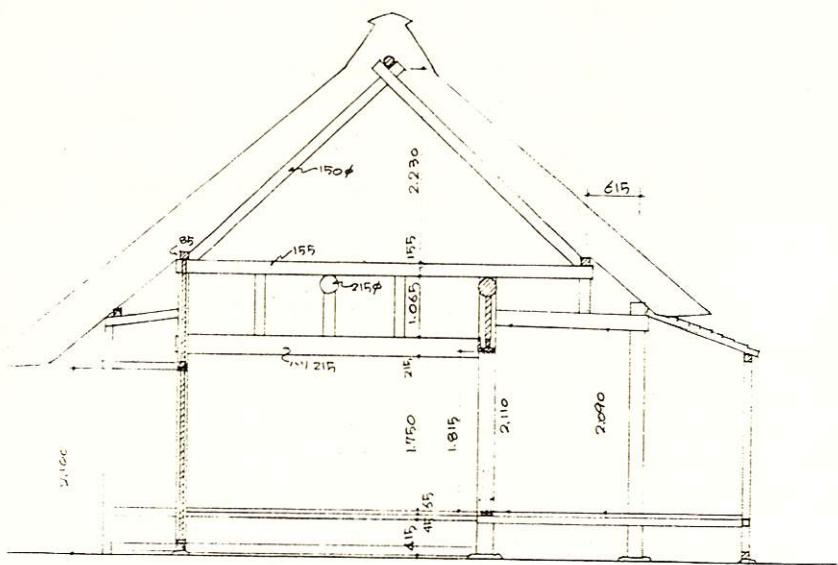
井上芳江氏宅右前庭より



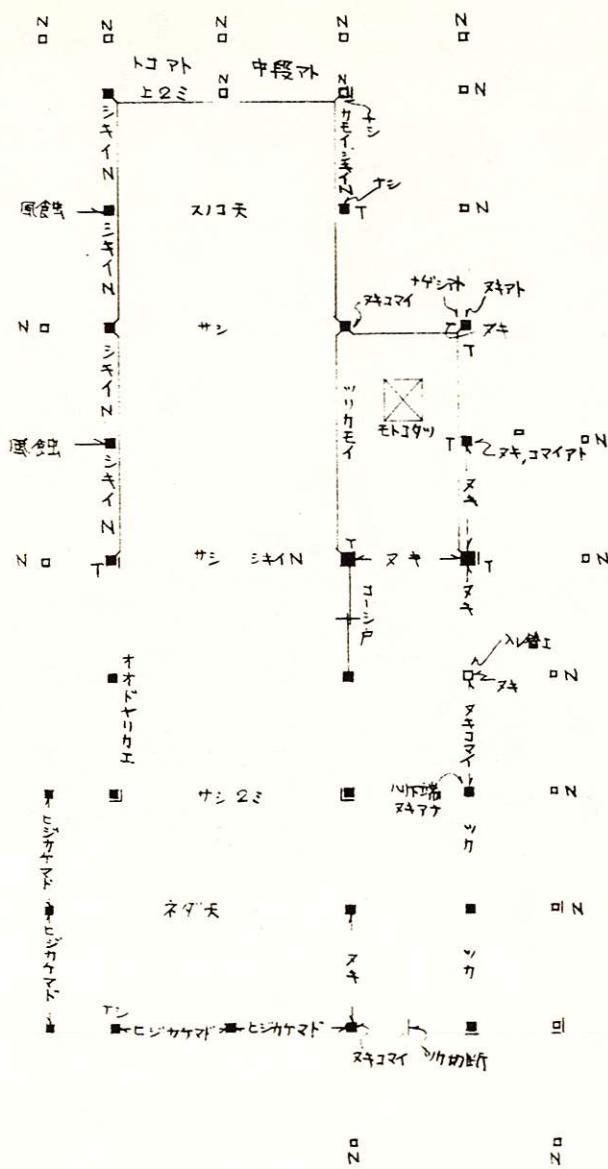
井上芳江氏宅
東京都福生市志茂28
現状平面図
1/100
調査年月日 昭和50年4月27日



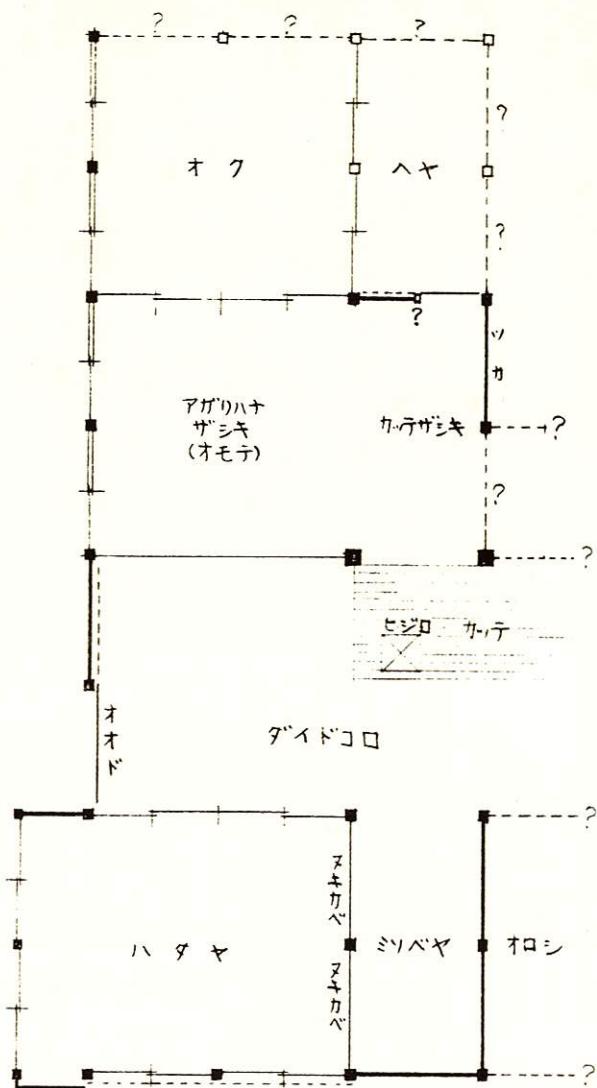
井上芳江氏宅
東京都福生市志茂28
主要寸法図
調査年月日 昭和50年4月27日



井上 芳江氏 宅
東京都福生市志茂 28
断面図 1/60
調査年月日 昭和 50 年 4 月 27 日



井上芳江氏宅
福生市志茂28
痕跡図 1/100
調査年月日 昭和50年4月27日



井上芳江氏宅
東京都福生市志茂28
復元図 1/100
調査年月日 昭和50年4月27日

(志茂二一番地)

雨戸は後のものである。

鈴木家は持主が変わり、古来からの室名、間取りについて聞き取りが得られなかつた。近住の古老の話によると、玉川上水ができた頃、不便であるからとの理由により、現在建物のある位置から道路を距つた向い側の位置（志茂十八番地あたり）に、この家の当初の家族（木村武一氏の本家）が移住してきた。そこに八代住み続いていたが、現在の持主である鈴木家が家を買取り、三代住んでいる。現在の位置へは六十年前に道路改修の関係で引いてきたものであるとの聞き取りが得られた。

玉川上水が出来たのは一六五四年であり、世代が十一代（木村、鈴木）続いていることからも二百五十年ないし三百年以前の建物と考えられる。

軒が深く、土間も暗く、梁の曲線を見せており、一見して吉い民家という感じを受ける。現状では床の上部分が三室に分かれおり、土間には板敷の部分・風呂場が設けられている。風呂場は新しく、当初のものではない。板敷の部分は床の高さが低く、当初のものではないとしても部材の表面の色から判断して相当年数を経ていると思われる。

南側の八畳と縁側の境には現在二枚の引違い障子戸その外側に雨戸がとりついている。しかし、敷居・鴨居には三本溝が彫つてあり、一枚板戸・一枚障子戸であつたと推定され、

西側の押入については外周の柱が全て新しい点から、後の時代のものと考えられる。しかし柱には痕跡が無く、当初西側が開口であつたか、柱が取り換えたものかいずれかであろう。

十畳の部屋の南側の部分は柱によつて、一間と一間半に分割されている。柱間一間の部分は二本溝、一間半の部分は三本溝が敷居、鴨居に彫られている。この柱間を仕切るには半間巾の引違い戸が一間の部分は二枚、一間半の部分は三枚、最低必要である。現状では八畳南側のように二枚の板戸と採光のための障子戸を併用することが不可能であり、十畳のみ採光を考慮しないとは考えにくく、この部分はおそらく改造を受け、雨戸を設けられたものであろう。

十畳の間と土間境には障子が使われており、鴨居は上から釣られている。古い民家の場合、この部分の間仕切が無い場合があり、また釣り鴨居を用いることは江戸時代初期には少なく、従つてこの部分の障子戸は当初のものか疑問である。十畳の部屋と北側の境界は障子戸で間仕切られており、上部には欄間がある。この欄間は北側の部屋の採光を考えたものであろうが、江戸初期に民家で欄間が使われていたことは考えにくい。この間仕切の土間側戸当りの柱は梁が上部に渡つていて構造的に不要な柱であり、障子の戸当りの意味しか持つていない。当初の柱であれば梁をこのように架ける計画

はしないものと考え、障子戸を後の時代に取り付け、その際戸当りの柱として補つたものと考えられる。以上の考察から、

障子戸での間仕切は後補であると判断する。

北側の部屋は間口六、六八尺、奥行四間半の細長い一室となつてゐる。土間境との間仕切は無く、奥の便所は新たに設けられたものであり、この部分は土間から奥まで一直線に見通せる。このような細長い部屋の用途は不明であり、間仕切で分割した方が使い易いと考える。十畳の部屋との間仕切が後補である点を考えると、土間寄りの部分は一室となり広間型の間取りに属するものと考えられる。広間に半間の土壁が張り出してきてる点から、この張り出した部分に土壁あるいは間仕切建具が取付けられていたと考えられる。しかし、そのような痕跡は見られず、上部に四角い穴が明いていただけである。したがつて、この部分の柱が取り換えたものでない限り、間仕切が有つたと断言できず、柱についても取り換えられているかいないかは断言できない。

北側の外壁開口は敷居鴨居が新しい点、雨戸が新しい点、季節風を受ける北側にすき間のでき易い開口部を設けることは疑問であることなどから、開口は北ではなく、全て後の時代につけられたと考える。

土間は、三間×二間半で、入口は硝子戸一枚の引違いとなつてゐる。この入口には敷居の痕跡があり、上部にはまぐさが入つてゐる。したがつて、一間の大戸が使われていたと判

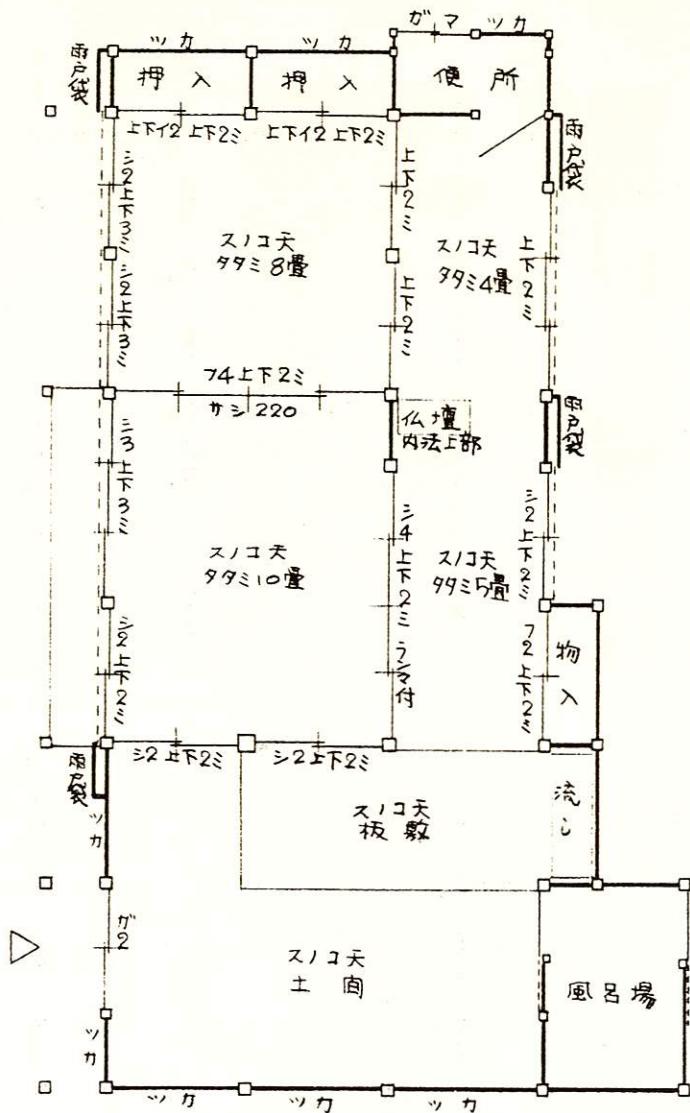
断する。

土間周囲の壁には一間おきに柱が立つてゐる。土間にはハタヤ・ミソベヤ等は無く、一つにまとまつてゐる。土間天井はスノコが張られているが、梁が見えるようになつてゐる。土間外部には貢、小舞の痕跡があり、一部柱は切断された痕跡があり、当初、或は中古において現状とは異つていた可能性もある。

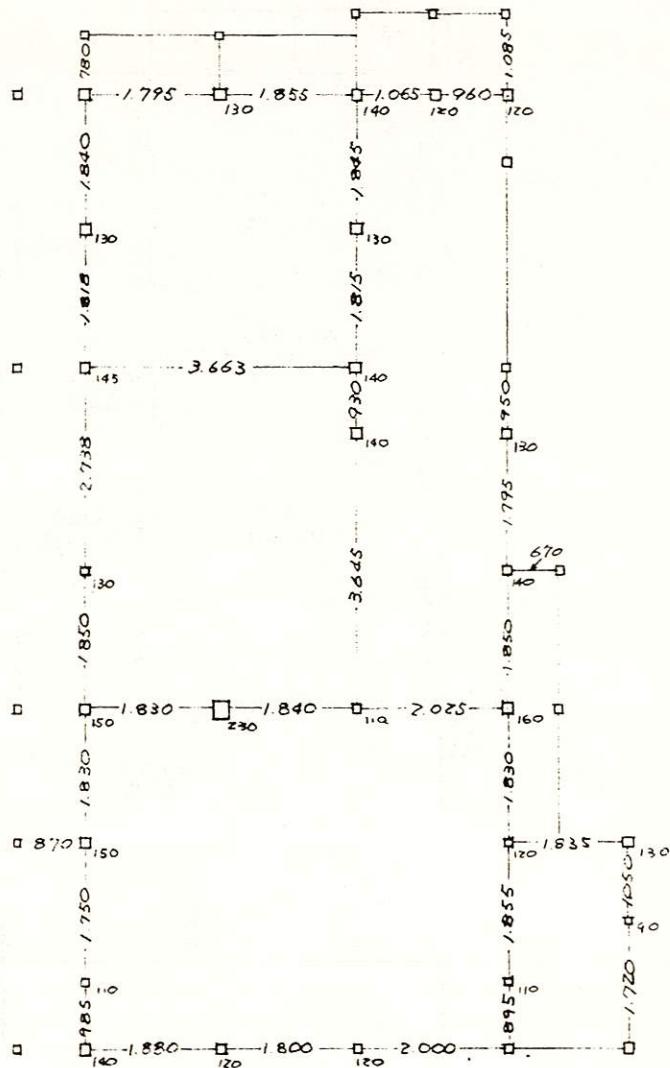
現状では床にタタミが敷かれ、天井にはスノコが張られてゐる。当初この建物が広間型であつたと仮定すれば、ヒロマには畳を敷くとすべきができる。このような計画を当初からするはずが無く、八畳の部屋以外は板敷であつたと考える。南側の三本溝の鴨居、敷居が残つてゐる点、広間型であつたと思われる間取、柱が手斧けずりである点から古い様式を持つものであり、この家の建築年代は江戸時代初期のものと思われる。



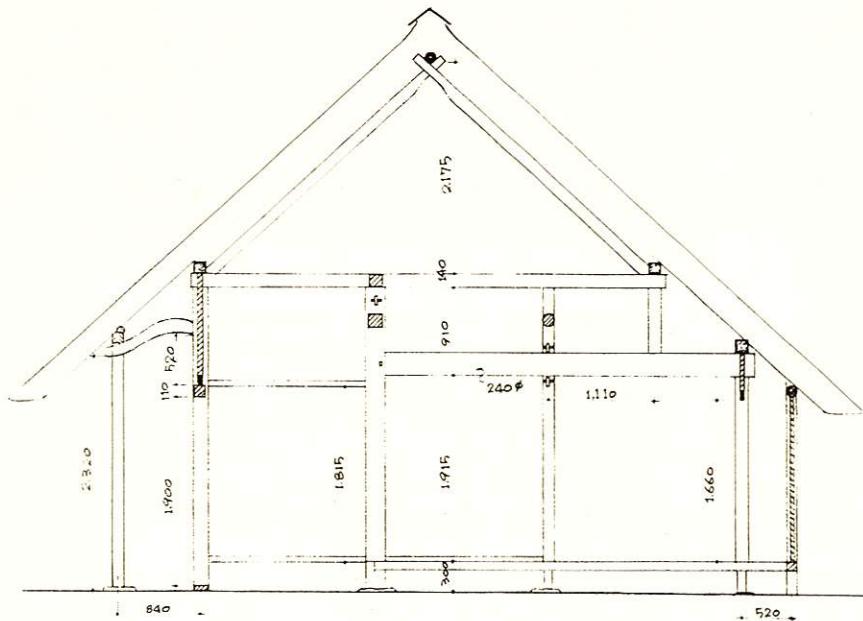
鈴木重利氏宅



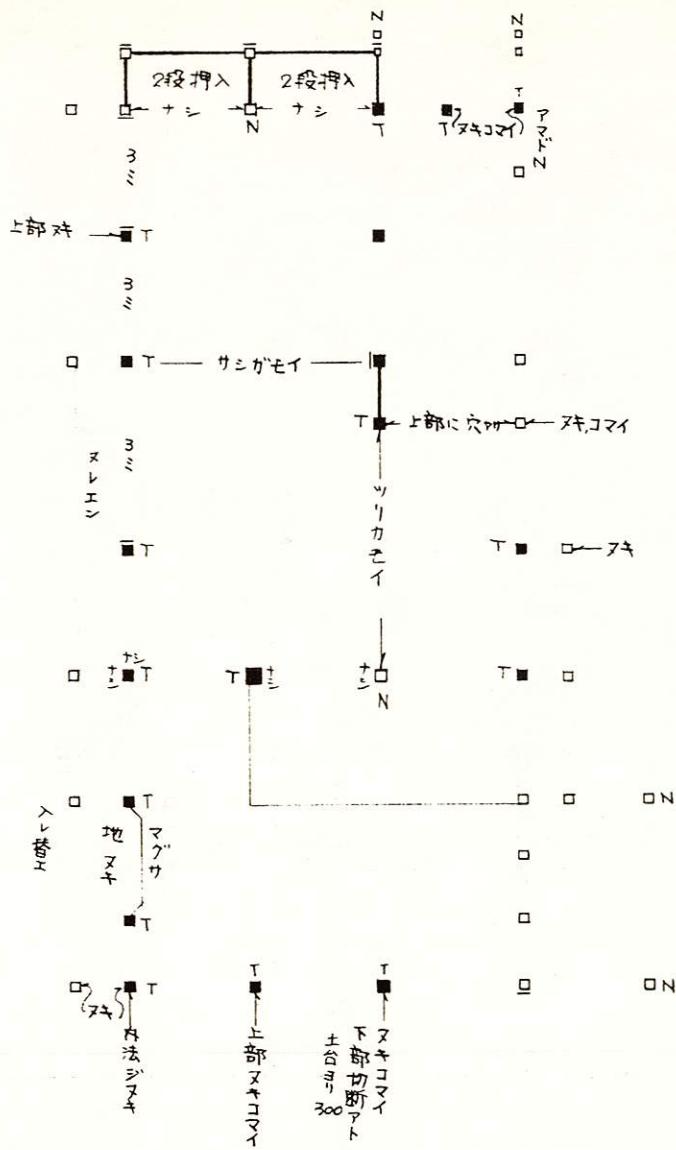
鈴木重利氏宅
東京都福生市志茂21
現状平面図
調査年月日 昭和50年5月11日



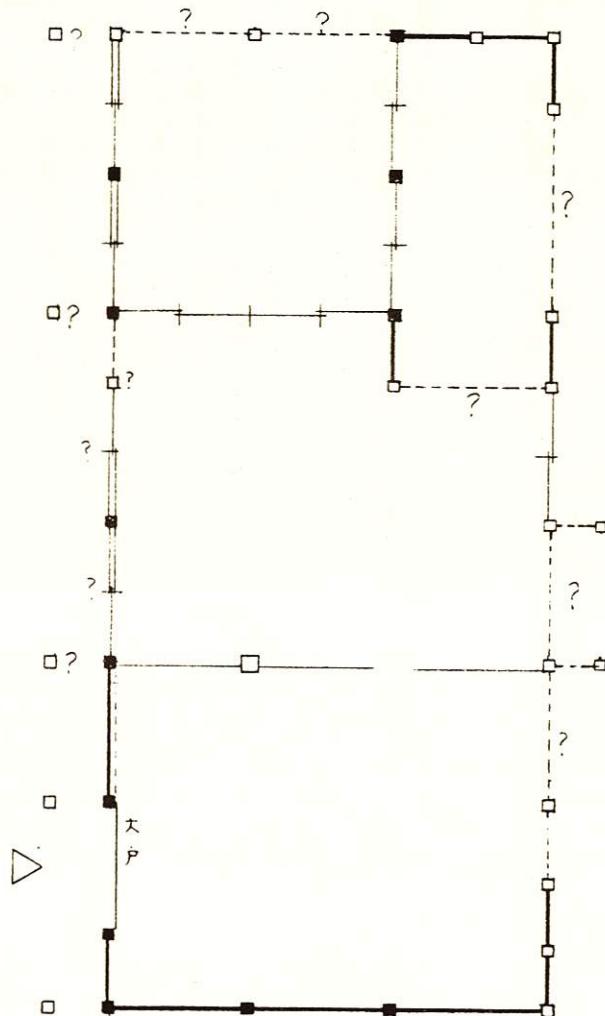
鈴木茂利氏宅
東京都福生市志茂21
主要寸法図
調査年月日 昭和50年5月11日



鈴木重利氏宅
東京都福生市志茂21
断面図
調査年月日 昭和50年5月11日



鈴木重利氏宅
東京都福生市志茂21
痕跡図
調査年月日 昭和50年5月11日



鈴木重利氏宅
東京都福生市志茂21
復元図
調査年月日 昭和50年5月11日

### III 今回の調査の反省

今回私達が調査することができた民家は全部で四棟といふ小数である。

一地域の民家について論議をするためには、その地域に残る少なくとも明治初期以前の民家を総合的に調査し、年代の或程度明確な、指標となる民家が数棟必要であり、改造を受けている部分の少ない民家を調査しなくてはならないと考える。

また私達の能力、専門的知識の不足、さらに現在使用中の建物であり、隅々まで調査することは不可能であり、復元にも多大な問題が残ることは素直に認めざるを得ない。

調査者自身にとって、今回の調査は大いに勉強になつた。しかし、成果を公表することは冒険的であり、躊躇せざるを得ない点もある。

従つて福生の民家を総合的に論ずることは不可能である。今後なさねばならないことは、この調査した四棟を、現在までに諸先輩によつて成された成果の中に位置づけることである。

しかし、私達がこれら全ての成果を咀嚼し、充分に四棟の位置づけをするには現在の能力では不可能であるので今後の研究とし、今回は資料として留めるのみとした。  
尙ほこの調査に当つて特段の御協力をいただいた笠本・村野

・井上・鈴木の各家に深くお礼を申し上げると共に、調査を直接担当した横浜国立大学建築科の方々や関係の方々のお名前をあげてお礼を申し上げます。

椎名 昭・和泉 勝彦・大塚 俊一・渡辺 礼子・

杉田 友子・平岡 昌一・島田 宇一